

福 井 県 医 師 会

だより

第718号 令和3年(2021)4月



花筐のしだれ桜 (越前城福寺)

鯖江市 清水 元博

表紙写真説明：花筐のしだれ桜 (越前城福寺)

鯖江市 清水 元博

城福寺境内にある「花筐(はながたみ)」と呼ばれるシダレザクラは、高さ10メートルを誇り、越前市を代表する名木の一つとして知られています。この桜は、味真野地区にゆかりがある継体天皇が愛したとされ、県内に伝わる能楽「花筐」にも謡われています。撮影当日は、快晴でやや順光気味でしたが、青空を背景に咲き誇る様子を撮影することが出来ました。

醫 縫 録

新型コロナウイルス感染症と 地域医療構想

福井県医師会副会長 安川 繁 博



多数の新型コロナウイルス感染者を乗せたダイヤモンドプリンセス号が横浜に入港したのはちょうど一年前であった（原稿執筆時）。その約1か月後、福井県では感染の第一波が押し寄せ、4月はじめには人口あたりの感染者数が東京都と一、二位を争う状態に陥っていた。この頃は福井県と県医師会、また感染症指定病院をはじめとする県内の基幹病院との連携が十分にとれておらず、入院病床は逼迫しており、厚生労働省のクラスター班が介入するまでになってしまっていた。この状況打破のため県との話し合いをほぼ毎日行い、更に県内の基幹病院の院長・幹部職員を緊急招集し、新型コロナウイルス対策の会議を開催した。初回の会議では感染症指定病院の窮状が示され、新たな受け入れ病院を求めたが、その場で積極的に協力を申し出る施設はほとんどなく、池端会長の「できないことを言っても何にもならない。次回までに自分たちのところで何ができるかを考えてきて欲しい。」という言葉で閉会となった。ほとんど間を置かずに2回目の会議が開かれたが、会長の言葉も効いてか、受け入れを行う病院が増え、感染のピークを過ぎたことも相まって第一波を乗り切ることができた。この会議はその後も何度か開かれてきたが、新型コロナウイルス感染症という共通の目標に向かって文字通り忌憚のない意見を出しあって話し合いをくり返す中で、重症患者を主としてみる感染症指定病院、中・軽症患者を受け入れる病院、コロナ患者以外の患者を積極的にみる病院、診断が確定するまでの疑似症例を受け入れる病院、更にはポストコロナのリハビリ・療養を受ける病院など役割分担の形が出来上がってきた。また県との話し合いの中で、患者の発生状況などをみながら4つのフェーズを設定し、それぞれの段階で入院病床を用意する病院をあらかじめ決めておいて入院病床を確保していくという福井方式ともいべき対処法を、4月という早い段階で構築することができた。これは国でも高く評価され、厚生労働省が現在出しているフェーズの考え方のモデルになっているものである。県との連携がよくなり退院待ち患者の収容施設や県医師会新型コロナウイルス感染症対策センター（PCRセ

ンター）も全国に先駆けて開設、多くの会員の先生の御協力のもとに今日まで続いている。

地域医療構想調整会議はこのコロナ禍の中で一旦中断された形になっている。これまでは2025年に向けた病床数がひとつの指標になっていることから、病床削減ありきではないと言いながらも議論が進みづらいものであった。本来は人口減少がすすむ将来を見すえて、それぞれの地域医療のあり方を在宅医療介護なども組み合わせた形で考えていくものと思われるが、これに医師の偏在の問題、働き方改革の問題もからんで複雑なことになっている。昨年国は病院が急性期と慢性期の病床を一割以上減らしたら、一床あたりいくらかの補助金を出すという減反政策のような話を出してきた。これ以上ない直接的な病床削減の方法である。自分のところにあてはめて試算してみたところ、話にならないのでやめたが、どれだけこの話ののってくるのだろうか。このコロナ禍を踏まえて国は地域医療構想の考え方を改めようとしているが、まだ具体的な話は聞こえてこない。今回のようなパンデミックが起きたときの病床確保をどうするかなどを考慮に入れて考えていると思われるので目標数値が少し緩くなることがあるかもしれないが、県へは進められるものはどんどん進めるようにという指示もあるようだ。どう変わるかしっかり注目していかなくはないと思う。

今回のコロナ禍の中で経験した、県内の多くの病院が集まり話し合っってしっかりした役割分担を行って対処すること。これはある意味で地域医療構想の一つの形につながるものではないだろうか。新型コロナウイルスという全県をあげて対処しなくてはならない相手だから利害関係のある程度考えずに協力することができたのだろう。まだ具体的な方策はうかばないが、何か将来の医療構想につなげられるものはないだろうか？